

日本文学における可咲と機智の美

斎 藤 清 衛

A 綜 論

B 日本文学の問題

a 万 葉 集

b 古語拾遺その他

c 歌謡一汎

d 散 文 物

e 演 劇（田楽，狂言，喜劇等）

C 結 論

(A) 綜 論

春ともなれば百花そのはなびらを開き，互に艶美を競いあっているようである。しかし晩春の風が一たび吹きくると，梅花も桜花も夢の間に散り落ちてゆく。と云えば人間の持つ宿命も同様であって，玉のような愛児の中には，病にかかってわずか五六年の生命を保ち，そのまま死去するものもある。一生の間疾患に悩むものがいかに多いことか。病院はつぎつぎに建設されながら，入院を希望しても，病室が無いために診断を断れたという話はいくたびも聞く。新聞の広告面に，新薬の名が麗々しく列挙されているが，あの高価のものを買わねばならぬ患者が到る所にいるからのことであろう。その他，一日の新聞にも死亡者の氏名が何と多く掲げられていることか。人生無常とは仏教唯一の真理と宣伝されているが，人類には長寿の欲望が悲しく満たされてないことは偽りがたい。すなわち人として現世に生れ出るそのことがすでに悲痛そのものであるとも云えるのではあるまいか。

凡そ文芸の表現とは，人間のもつ精神の中の感情作用を表わすことをその

主眼としている。感情の内容であるが、知性を中心とした古代の心理学から、次に **René Descartes** (1596—1650) に下り、感情生活を驚異・愛憎・喜悲・欲望等に分析して一応解釈を得たようなものの、なお多分に思弁的のものに偏して、総体的説明というわけにはゆかない。やはり **Wilhelm Wundt** (1832—1920) に到って感情の研究法を印象面と表出面との両側面に分け、究極的要素として単一感情と云うものを立て、その次元に快と不快、緊張と弛緩、興奮と沈静などの対照を示すことの方が妥当の論であるよに思える。或は快と悲との両側にこれらを総合化するも一つの方法であろう。ところで生の無常視の問題に立返ると、とかく悲哀、悲嘆、悲痛、悲壮の感情は文芸ではその王座を占め続けたものの様態を示す。快笑は発散的であるが、悲哀はむしろ集中的沈下的である。更めて述べるまでもないが **Greek** の **Aristoteles** (**B.C** 384—322) はその著「**Poetica**」(詩学)の17章で論じている「悲劇論」は後世の学者にも影響を与えたところが多かった。その要旨は、

悲劇とは高尚のもので、それ自身に完結する。そして適宜の大きさの行動の模倣ともなりうるものである。それが特別の魅力を持つ言語で表現され、別の場面においては他の語で表現され、舞台上に演出されると一般物語とは異ったジャンルを打ち出してくる。かつ、憐憫と恐怖との刺戟によって、その種の感性を軽減し時に排泄 (**Katharsis**) する作用さえも示してくれる。

この句の中の「それ自身に完結」とあるは始中終の構成上唯一絶対の統制をなしたことをさしている。演出における「時」の統制力の如きであって、喜劇においてはそれが必ずしも緊要視されない。その点喜劇以外の笑話や機智の文学に対しても等しく考えられる。悲劇の持つ自体の特色なのである。

古来、悲劇の典型とされている **Shakespeare**(1564—1616)の“**Hamlet**”(1602頃の作か)については、「悲」の解釈が区々であるけれど、誰もこの一皇子を阿呆者とか、ノイローゼ疾患者だと解釈するものはないだろうと思う。観衆は、この劇の高尚なことを感じ、それなりの完結を認識している。その結果

「憐憫と恐怖」との刺戟をすることもできる。Arthur Schopenhauer (1788—1860) が云ったように人生そのものはすでに出発点から一大悲劇なのであると解してもよい。ただし残された問題は、悲劇を唯一の法則とみるか否かに係わっているし、換言すれば破滅を人生の真相と観ずるについてそれを肯定するか否か態度の別である。人類は、かような悲壯破壊の相に溢れた現実を傍観してすむものだろうか。“To be or not to be, that is the question”と自問しても、それは解決不可のものとなれば自殺でもする以外に方法はない。しかも地球上の人類は、その発生以来、寿齡に長短はあっても、死去することを欲しただけであろうものは、その一部分にすぎない。天災疾患戦乱破滅の類をできるだけ避けようとするのがやはりわれわれの持ち続けて来た本能である。

しかし詩歌人には哀歌を唱い、小説家には悲惨の物語を描き、劇作家には悲劇を書くことに自己の満足を得ているものが多いのは、如何なる心理に基いているものか。そこで現世に対立して存する「陰陽」両気の問題から些かの考察を進めてゆくことにしたい。

宇宙をすべて陰陽両気の相対性によってなるものと考察した学説は古今東西甚だ多い。古来わが国にも中国の易経などの影響をうけて正面に掲げている学者もある。例えば「玉海」(その五行論)「呂才陰陽書」(全五十三巻物)、「広済陰陽百忌曆」(一卷物)、「玉璣新撰陰陽書」(全三十巻物)など各種列举できる。その中で便宜和書「雑談集」の一節を以下に掲げて見ると次のようである。

一水万波トナレドモ、湿性不^レ失、虚無太道、次第成^ニ万物^ノ、陰陽形不^ニ相離^ニ、如^ニ功德黒闇^ノ、每物陰陽形也。深ク達スレバ、理智ノ法門也。理智寂照ヲ外典ニ陰陽ト談ズル故也。男ハ陽、女ハ陰也。男ハ本鳥(モトドリ)ヲ上ヘ取上ゲ、女ハ髪ヲ下ヘ推下ス、是^レ陰陽ノ形也。南ハ陽、北ハ陰、女ヲ北方トイヘリ。(巻一)

とある。なおこの両気を万物に宛てて考えると、君・父・夫は陽、臣・兒・婦は陰。天・日・明は陽、地・月・暗は陰。統・賢・感は陽、破・愚・心は陰。尊・貴・吉は陽、卑・賤・凶は陰。動・強・生は陽、静・弱・死は陰。

という類の対立もそこに当てはめることができる。すなわち陽は広く発散する燥気を中心とし、陰は狭く圧搾しがちな湿潤さである。もとよりこの両者は、気象に見られる暖寒の気のようなものであって、相互交替を繰返している点は、**Georg Wilhelm Friedrich Hegel** (1770—1831) の哲学の基本をなす弁証法の矛盾否定の高次化と共通するものを示している。例えば陰陽の対立矛盾は、陰は陽を否定し、更に陽はその陰を否定する。しかも否定交替の過程において、その総体が止揚されるところに、その矛盾は新たな解決に到達し、その解決は更に矛盾へと展開を示してくる。哲学という正反正の原理であるが、太極説を立てて、宇宙は陰陽に別れ、更に各々が八卦となり、八卦は三百八十四爻に別れて発展するといわれたことも類似の宇宙観であろうと思う。

ここで「可咲」と「悲哀」の感情表出の問題に立返るならば、世界文学をひろく大観するとその表面は種類において悲をそのテーマとした詩歌、小説、戯曲の傑作が多数であるのみならず、古今を通じ重視されているものもそれに含められ、相対性の可笑滑稽喜劇的作品には殊更大作と見られるものがない。人類が心から玩味するところが悲壮面か、快笑面であるかはここに別として、こうした現実は何に由来原因しているのだろうか。これについて疑惑を抱いた評論家、思想家は、欧州の **Renaissance** 以降の学者の中に乏しくない。特に南の **France** や **Italy** の学者には目立ってそれが多い。開放的・積極的で総じて明かるい人生観が齎したものと考えられる。生を現世にうけながら、何故に苦悩悲観懊悩を当然のもののように誰もが承認しているのであるか。個人としては出来るだけ生を楽天視し享楽するのが、人の人としての当然の在り方ではないか。**Greek** 劇の起源は、悲劇物より喜劇であるとの諸説は、史実として充分肯かれる。紀元前五世紀時代に神話や世談を取入れ、滑稽な物真似をする程度のもので、舞踊を加えて **Dionysos** 祭に行列したものが古喜劇の姿であり、世紀の終りになると五穀豊饒の祈りや男女結婚の祝福にそれが結びついて、素朴ながら劇の形式を帯びてきたものである。

ところで世界文学に普及する喜劇、滑稽小説笑話、狂詩歌は、いかに規定できるだろうか。すなわち悲劇、悲壮小説、哀話は、一般の詩歌韻文に対比し、いかに境界線を設けうるかという提案がなされる。先ず、宇宙における陰陽の対立は真理としての太極から考察すべきだ。との見方にも一おうの道理がある。中国六経の一つである易経がわが国に伝えられた時代は不明であるが、中国では太古伏羲氏時代のものと考究され、大禹、文王、周公、孔子の四聖の手に依て完成されたものと称されているものである。「異朝書籍考」（林鷺峯編？）には

伏羲始メテ八卦ヲ作ル 其ノ後、周文王、周公旦、孔子皆相継デ是ヲ述ブル。故ニ易ハ四聖人ノ作也。天地陰陽ノ理、万物変化之義吉凶禍福ニイタルマデ皆ソナハラズト云フコトナシ

と説かれ、経子史要覧に依ると

易を学ぶは陰陽変化の道を知らんが為なり。易は変化の義にて往来変化すること暫くもやまず。往来は昼夜寒暑の如きを云ひ、変化は生成榮枯のごとき是なり。又易に数あり。数とは物の命数なり。君子易を学べば命を知り時を知るゆゑ惑ふことなし

などとも書かれている。宇宙を時間と空間との両面で釈明したものと云えよう。尤も易経は難解の書であって、後世魏の王弼等、勤んで試解を試みたものもあるが今なお具体的科学的明解書はない。例えば同書に

天下国家の事に預りて、芸の用重し。君子これを学べば心の疑慮のぞき清潔になり、動転することやみて、静になり陰陽変化の理に達したることなる

故に礼記に潔静微易之教也と云ひ、繫辭伝に「聖人以レ之洗心といへり。」

などと書かれ、一の哲学説である点、孔子は「易有太極」と述べ、宋儒周濂溪（1017—1073）は、「無極而太極」の論を掲げているのである。陰陽は本質的に矛盾するものでないことを敍べて居り、「太極謂ニ天地未レ分之前一、元氣混然為レ一」（古今類書纂要卷一）「道生レ一即太極也」（同）などと、宇宙の発相に神乃至無形のものが存し、先ずそれが陰陽に分れ現象化したものと説くもの老子の世界観も明らかに同系のものであった。老子哲学の特色は、知

性発達以前の混沌とした人間性を主題としたことに於ても共通である。老子経の巻頭に「道ノ道トスベキハ常道ニ非ズ。名ノ名トス可キハ常名ニ非ズ。無名ハ天地ノ始メ、有名ハ万物ノ母、故ニ無欲ハ其ノ妙ヲ觀、常ニ有欲ハ以テ其ノ微ヲ視ル」(和訳)と基本を述べているのは、名とか道とかいう知的概念を讃える未然の無為混沌の宇宙を重んじたものであるからである。それは古事記伝説に諸冊二神の国造りの物語に沼予を以て「塩許袁呂許袁呂邇にかきなし」とあるように湿潤混沌とした万象未分の状態と同様であるが、それは一切を包含する神の性だとも見られる。ところで、精神的には知情意が分離し、情そのものは悲喜両面に別れて、神話時代は遠く過去のものに押しあげられてしまった。ここに政治、道徳、経済等に係わる、いわゆる文化の発生を看るのであるが、感情表現に関するものとして、人類は可咲(笑)になお原人性の特質をよく温存しえたことも考えられるだろう。ただし、「人間の笑」そのものの定義は可なり困難である。

生物学で、人類のみ自由に笑いうる表情を持つと解かれている。なるほど動物の中、犬や猫、馬や牛やも、綿密これを観察すると、好みの餌を与えられた時、また飼主から首を撫でられた時などその尾を振るとか、耳を立てるとかして内心の欣び、嬉しさを表わすことはあるとしても、たとえ、類人猿を見るも、三四才の人間幼児が大声をあげて笑を示すというようなことは無い。キャキャと赤ん坊が笑うのも、心理的肉体的の特殊衝動によるもので、ただに父母の笑を模倣した結果のみとは考えられぬ。もちろん、何等かの望が果されず、不満のある時には「泣」という本能をも持っているが、喜び、嬉しみ、満足などの情緒に関連の多い「笑」は、一層欲望の本能化だと解される。笑の種類、文字別につき大言海に

嗤ノ古字、哂ハワツト笑フ、哄ハドツト笑フ、莞ハホホエミ笑フ、粲ハ齒ヲ出シテ笑フ、囁ハフキ出シテ笑フ、𦣻ハアザケリ笑フ

と解説されているが、笑を生ずる時の心理には、種々の原因のあることは推察される。かつ、論語に「樂然後笑人不_レ厭_二其笑_一」(憲問篇)とあるように、一般の笑は大衆に欣ばれている表現と見るべきものである。野語述説の「笑

者中心有^レ悦^ニ而発^ニ達於外^ニ之貌也、故謂福来之端」とあるのは、いわゆる笑う門に福来るといふ諺と同義と云えよう。大言海の笑の種別は、「アザケリ」の以外は、笑の形容別であったが、釈迦の微笑に関連し、凡そ大智度論は以下の九種の由来を指摘している。

1. 妓樂ヲ見テノ笑
2. 内ニ嗔恚ヲ懷イテノ笑
3. 僞慢ナ笑
4. 物ヲ輕ンジテノ笑
5. 事弁シテ喜ビテノ笑
6. 事柄ヲ作ル能ナキヲ見テ羞恥スル笑
7. 詐ヲ懷キ善ヲ装ツテノ笑
8. 稀ナ事ヲ見テノ笑
9. 歡喜シテノ笑

仏の微笑については、比丘袈裟を見て仏事を成弁する稀なるを見ての笑と説明されている。その他笑痴、絶倒という類に及ぶと、これらの分析は益々複雑混乱してくる。西洋思想にも十九世紀頃から漸く、笑の哲理の研究が熾となり、例えば英の **George Meredith** (1828—1907) は、“**Essay on the Idea of Comedy**” を著して、喜劇のありえない国には文化は存しえない、とさえいう一大結論に到達した。仏の **Henri Bergson** (1859—1941) の「笑の研究」は笑そのものに多様な問題あることを指摘した。(広瀬哲士和訳がある)。その一節をひくと

笑は当にこの種のもので、一種の社会的態度である。その鼓吹する恐怖によつては、偏狹を鎮め、ややもすれば孤立し、眠りにふけらうとする第二義的の或る活動を常に覚醒せしめ、且つ相互に接触させて置き、尚社会といふ団体の表面に機械的凝団のものとなつて残りさうなものを悉く軟かくするのである——

これは、同書の2ページに出ている「吾々は何よりも第一に可笑の裡には何かしら活きたもののあることを認める」と云う宣言を一層つよく説明し打出

したものである。また64ページに見える「精神的方面がその原因なるに拘らず、肉体的方面に吾々の注意を喚ぶ出来事は、つねに可笑味を生ずる」との論をも裏付けている。なお、Bergson の思想については、後述することになるが、彼の文芸論は、喜劇、滑稽文学について独特の哲学的解説を試み、必ずしも喜劇は悲哀のものに比して低劣のものでないことの烙印を押したものであった。

由来、紀記の編輯は、神代から奈良朝時代に及ぶ日本皇室史であると考証されているが、柳田国男氏も問題としているようにその誦習者といわれている年令28才の稗田阿礼は、謹厳な態度でその文面を誦習しただけのものではなく、むしろ伝説の興趣に心をひきずられて語ったものであろうと思う。天照大御神が天石屋戸に隠り給うた時の状を

天^{アノ}宇^{ウツメ}受^{カフ}売^ス命^{メノ}天^{カフ}ノ香^カ山^{ヤマ}ノ天^{カフ}ノ日^ヒ影^{カゲ}ヲ手^テ次^ジニ繫^ヒケテ天^{カフ}ノ真^マ柢^{サキ}ヲ縷^{カヅラ}トシテ天^{カフ}ノ香^カ山^{ヤマ}ノ小^サ竹^{サバ}葉^{タグサ}ヲ手^テ草^{ユイ}ニ結^{ムス}テ天^{カフ}ノ石^{イシ}屋^ヤニ汗^{アセ}氣^キ伏^フセテ蹈^{ウケフ}ミトドロコシ神^{カム}懸^カリシテ胸^{ムナ}乳^{ナカ}ヲ掛^{ツケ}キ出^デ、裳^{モヒモ}緒^{ホト}ヲ番^オ登^{ノボ}ニ忍^シシ垂^{タラシ}レキ。爾^{カレ}高^{タカ}天^{アメノ}原^ノ動^{ユル}ミテ八^{ヤチ}百^{ヒャク}万^{マン}ノ神^{カミ}、共^{ツク}ニ咲^{サキ}イキ

という一節などを、彼女は自らも笑い興じながら誦習したかのように想像される。古事記には、構想からみて殊更笑話というほどのものは出ていないが、神^{カム}産^{ムス}巢^{スベ}日^{ニヒ}神^{カミ}の手^テ僕^{マク}から生^ナれた小^コ人^{ヒト}久^ク延^{エン}毗^ヒ古^コの物語の類もあって、その読者に微笑をおこさしている。即ち崇高、雄大、嚴肅などを必ずしも主眼とせず大に比すると小、賢に比すると嘲笑されるような愚、確信に比すると矛盾、美麗に比すると醜惡さを出したものが多く、揶揄や皮肉を受け、諧謔や機智の語を飛ばす筋内容のものがその大半を占めている。その点は、明治の長谷川二葉亭 (1816—1909) が、深刻なロシヤ小説のあり方に比べ、近世末期の一九や三馬の文体を継承した明治前期の作家につき「如何なる文学も男子一生の事業とするに足らぬ」と慨嘆した意気にも同感される。しかし、茶番、落語、漫才^{マンザイ}の類は暫く問題外とするも、十五六世紀英の Shakespeare (1564—1616) 仏の Moliere (1622—1673) 等の作った喜劇類には、文人一生の制作として推奨すべき傑作があって、恐らく後世まで遺されるだろうと思える。

ここに Jean Paul (1763—1825) 英 Herbert Spencer (1820—1903) 等の評論を顧ると、笑の文学における **Surplus of Energy**, 即ち力の過剰ということ、或は矛盾から溢れ出た笑話は人間において最も自然の姿だということの意見を知るのである。人生において余裕の美を忘れないということ、それは如何に重要なことであるか。

もっとも、Shakespeare の悲劇の代表 “Hamlet” と喜劇 “Much Ado About Nothing” (「から騒ぎ」——1598作) とを比較して両者の優劣を定めることは到底できないことである。それは、万葉集の歌で、人麻呂、赤人の作を巻十六の嗤笑歌に比較すると、両者の辞句の巧拙を評しうるがその佳否を決しがたいそれと同様である。しかし笑の文学に関し、尠くとも次の数件の特色は承認されるだろう。

- (1) 社会の人々の融合調和から生み出されるもので、落語家のように、壇上で珍妙な身振や語^{ことば}を遣いながら、なお、よく聴衆をぐんぐん引擦ってゆける魅力が存している状態。
- (2) 社会はとかく個人生活の該心にのみ注意を払いその他は自動的慣習に譲^ゆねてしまいがちであるが、笑の文学は単一で独立した姿勢をつねに続け保っている。
- (3) 笑の文学は人形劇に似て他を機械化し、怪異なものについて自己を露出することも敢て辞しない。即ち「いたづら」を辞しない点が見える。
- (4) 笑の文学は、ただに無邪気や単純さが現れているというだけでなく放心を敢てし、やがてそれが無心の境地にさえも入りうる性質をもつ。
- (5) 笑の文学には、一件だけでは平凡にすぎないものも、他をそこに並べ加えて効果を示す特殊の性をも持つ。
- (6) 笑の文学は舞踊など他の芸能に関連があるが、健康増進に役立つ方面を持っている。

以上の諸項は、笑が本質的感情に係わると共に、原始的上古時代の素朴な社会から夙く存していたものとの実証をもなしているわけである。

(B) 日本文学の問題

すでに上代以降の日本文学に見られる可咲の表現については、綜論の中で若干触れて文例も示してきたが、代表的のものを以下において、指摘して見ることとする。風土記の地名起源伝説の中にも笑話めいたものもあるが、伝説的であるから、この際は省略しておく。先ず

(a) 万葉集——巻十六の嗤笑歌のことは些か触れておいたが、その他「詠数種物歌」「無心所著歌」があり、雑歌、相聞の部類にも可咲的の歌が相当に選ばれている。(頭番号は国歌大観の指定によったもの)

(2821) うましものいづくか飽かじを坂門等しつめのふぐしにしぐひあひにけむ

〔略解〕身分よく美しい坂門氏女王なるに何故だろう、角を立てた鬼のような醜悪人を愛人としたことか。(醜男をつめのふぐしと云ったところ笑を催している)

(2827) 一二の目のみにあらず^{ヒトツク}五六^{イツツムツ ミツヨツ}三四さへあり双六のさえ

〔略解〕雙六を見るとその采に一二の外に三四、五六とそれぞれ目がついている(雙六の采の目が一から六まであるのを句の機智をもって列挙したのである)

(3832) カラタチのうまら^{ツク}苅りそけ倉立てむ尿遠くまれ櫛造る刀自

〔略解〕枳(カラタチ)の簌を刈りのけてその地に倉を立てたい、櫛造りの女房よ簌の近くに尿をせず今後遠くでなされ(尿を滑稽の材料としたものは古事記、竹取物語、落窪物語、福富草子などに甚だその例が多い)

(3835) 勝間田の池は我知る^{ハチス}蓮なししかいう君が鬚無きがごと(ある女、新田部親王に献った作)

〔略解〕大和勝間田の池には今迄生えていた蓮が枯れて無くなっている、親王の生やした口鬚はみごとで、その鬚の無くなったと同じありさまだよ。

(3840) 寺々の女^{メ ガ キ}餓鬼申さく大神の男^{オウミツ}餓鬼^オ賜りて其子うまはむ(池田朝臣が奥守に与えたもの)

〔略解〕寺々にいる、肥えてる女餓鬼が、瘠男の三輪社の奥守を夫にして子供を生みたいと云ってるよ。

(3841) 仏造るまそは^{クマ}足らず水^{ミヅ}淳る池田の朝臣が鼻の上をほれ(前歌への返歌)

〔略解〕今、寺で仏像を造っているが手近に赤土（マソホ）が足りないで困っている。池田朝臣さん、君の鼻は真紅だが、その鼻を掘れば赤土の間にあうだろう、つまり皮肉的に応酬した作である。

その他、3842、3843、3846、3853などの歌は何れも、相手の肉体の異常であるのを嘲弄したものであって歌の贈答につき笑を催さしてくれる。が、短歌は形式上の制約があり、可咲のテーマを豊かに織り込むことが難しい。

「佩文韻府」に見える笑字の熟語は約二十余种出されている。

嬌笑、妍笑、帶笑、靨笑、竊笑、迎笑、戲笑、失笑、怪笑、巧笑、燕笑、諂笑、大笑、独笑、愧笑、嬉笑、冷笑、可笑、含笑、指華微笑等であり、その間に明確な区別も定めかねるが、万葉集に見られるものは、相手時には自身を常人のレベル以下のものと認めて嘲笑したものなども多い。巻四で有名な大伴旅人（天智帝四年—天平三年）の讃酒歌十三首やその他の中に下のようなものがある。

(341) 賢^{サカ}しみともの言はんよは酒のみて酔^{エイナキ}哭^{マホ}するし益りたるらし

〔略解〕賢人を気取って高説しているより、好きな酒に酔い酔哭する方が益さっている。

(3086) なかなか人にあらずば酒壺になりてしかも酒に染^シみなむ

〔略解〕まなかに人間様として威張っているより、酒宴になり変り、酒で身をしめしていきたいものだ。

(344) あな醜^{ミユ}く賢^{サカ}しらをすと酒のまぬ人をよく見ば猿にかも似む

〔略解〕賢者振って禁酒している人をよく見れば、まことに醜く猿の顔に似てゐるよ。

まさに自嘲、皮肉が中心とされ、歌の鑑賞者は、作者の放埒で無頓着の態度に笑を誘われる。その他、恋愛につき自信高きを詠んでいるものに（3858）此の頃の吾が恋力記し集め功に申さば五位の冠などがある。しかし総評され万葉集の可咲歌は、狭い範囲的に限定されていると見るべきだろう。

(b) 古語拾遺その他——なお奈良朝時代から、平安朝時代に亘り、可笑文学の考証に参考となる文献は、「古語拾遺」「三代実録」「日本記略」「大日本国現報善惡靈異記」の類がある。古語拾遺は齋部広成の著で、自氏並び

に中臣氏、^{ガルメ}猿女の淵源を敍したもので、斎部中臣は神の系統、^{ウズ}猿女は天宇受売命の子孫として、可咲を以て皇室に仕えたものと書かれている。平安朝時代の諸書に、滑稽諧謔のことを「さるがう」と呼び、漢字では改めて「散楽」と称している。歌舞品目（小川守中著文政5以前）には散楽は雅楽に対する雑楽であり、拍子を重んじた歌舞、即ち^{スシ}咒師（のろんじ）^{ハナト}隼人舞、また一般のすまひ（角力）なども同類視している。「三代実録」（藤原時平等撰、延喜元成）の元慶4、7、29日項には、天皇仁寿殿に御してその相摸を御覧あり、さらに^{クラノツカサ}内蔵官など散楽を演じて人々を喜ばしめたことが記されている。「さるがう」と「散楽」とは区別なく、滑稽、笑事を指したとしても、「さるがう」の語原には前述の猿女と係わる点が多いと云えよう。（「日本記略」の康保2.8.2日の項に清涼殿で猿楽を召して御覧された）

(c) 歌謡一汎——さて可咲とか滑稽とかの基となるものは、喜劇論と同様に、心慮、ことばに係わる主観本位のものと、容具動作に係わる客観本位のものとに両面に分類される。換言すれば万葉集などの詩歌——これには神楽歌、^{クニブリ}催馬歌、風俗歌、古今集などの誹諧歌の類がある。これは、その大要を語ったとおりであるが、ことばの用法特に心理的のものを契機とした以外のものは極めて稀である。靈異記は仏法説話を主とした編輯物であるが、その中巻に「見ニ鳥「邪姫ニ厭世修ニ善縁」」という一節があり、かって行基菩薩に伴って往生を契った弟子信厳なるものが、鳥の邪姫を見て厭世し、独り年若くして先に死んだことを、次のような歌で詠んでいる。（原文は万葉仮名であるが、仮名交りにして提示した）

からすといふ^{オウウツ}大嘘鳥^{エト}の言をのみ共にといひて先立ちいぬる

この説話は、果して史実の儘か否か判断できないが、その中に、ある可咲を催しめるものがある。しかし結局こうした事実において、かような歌を詠じた行基と云う有名な僧のことに係っているのである。等しく、催馬楽歌や風俗歌に比較すると、神楽歌はその歌詞も敬神祈願の内容のものであるべきだが、1（^{ニワビ}庭原）2（^{ヨリアイ}綾合）の順序に、古写本には約40首のものが挙げられている。かつ最後の10首は俗謡的であり、神楽そのものが深夜これを神遊とし

で舞踏するその歌詞とした結果採用したものであろう。かかる雑歌を合せ唱したものとして推定されるのである。一首は本歌と末歌とで懸合^{カケアイ}の形でできているが、その一例を引用すると、

(本) 我妹子^{ワギモコ}にや、一夜膚触れアイソ、あやまちせしより鳥も取られず、
鳥も取られずや

(末) 然り^{ナリ}ともや、我が夫^ハの君はアイソ、五つとり六つ取り七つ八つ取り
こゝのよ十^{トウ}はとりけむや

の如きがあって、詞中のアイソとかやとか人^{ニン}長^{チヨウ}(楽長のこと)がいて調子付けをしたものらしく、本歌は男子が愛人に呼掛けたものであり、末歌は女子がこれに懸合った内容のものである。その意味は、巧く多分に男女添寝を果しえたことを、面白く歌ったものらしい。本歌の「鳥」はシギ鳥であり、末歌で「十を取り」と添寝の床に入りえたことを掛詞的に歌い合わせたものである。一般に辞句の反復が多いのは、笑の文学の特色で、Bergson もその点を指摘している。

「催馬楽」^{クニエブリ}「風俗」^{アズマツソビ}「東遊」の題名で伝えられている歌詞には、卑俗の民謡らしい笑が大半に出されている。女子の髪櫛は自ら彼女で造るのが当時の習であったが、「挿櫛」という一首を見ると、村娘所有の十七本の櫛を、恋されたある役人に一本一本抜き採られたことを興味ぶかく詠んだものもある。「隠名」^{クボナ}という一首は「くぼの名をば何とかいふ」と歌い出して、陰部につき異名方言を列挙したもので、反覆の辞句と同様に笑をおこしたものと思う。

「古今集」中、その他家集の俳諧歌は、上述の歌謡に比べ、性格を異にし、辞句の中に機智を弄び、笑の種とするものが多い。古今集の俳諧歌は計58首あるが、作者不明の歌が多い中に、才幹で知られた素性^{ソセイ}(俗名良峰玄利)その父遍昭などの詠が交っている。

やまぶきの花色衣^{コロモ}ぬしやたれ問へど答へずくちなしにして(作者素性)
つまり「くちなし(梔子)」の花だということに「口無し」(無返事)と巧に掛けて詠んだものである。

秋の野になまめきたての女郎花あなかしがまし 花もひととき（作者遍昭）
この歌は、女性を女郎花に譬喩し、女の盛りも短いことを諷刺したものと受取られる。その他別趣向のものも多いが、ほぼこれに類した着想である。

可咲の詩歌といえ、この以外に、連歌の附合ツケアヒの中の一つ、狂歌、俳句、川柳、狂漢詩など特に近世文学作品の中に増加してきたが、今は解説する余紙が無いから、それを省略する。もっとも、ここに「前句附」という別のジャンルがあり、例えば「をかしや、をかしや」という類の前句に対し、巧くはまるよう後に短句を続けることが一時流行し、内容は総じて卑猥なものであるが、読者を笑わすことを競うような形式のものが存していた。

(d) 散文物——次に国文学の中で、物語（説話を含める）、随筆、滑稽小説類に看られる笑、機智の一般について考察したい。物語と説話とは、本質において明白な差別は無いが、散文小説の最初とされているのは、誰しも知る「竹取物語」である。その構想は主人公に月界のかぐや姫を出し、五人の公家が姫をわがものとしようと、結局さまざまの試練に失敗することとなる、総じて笑中心の童話めいた物語である。「天竺の仏の御鉢」「蓬萊島の珍木」「龍の首の玉」「唐の火鼠の皮衣」などを姫の所望として出しているところなど特に非現実化されているが、この種の恋争の失敗談は、中古初期の読者を必ずや欣ばしめたものであっただろう。「うつぼ物語」「落窪物語」「源氏物語」などは、概ね人情味を中心テーマとした物語であるが、敘述の間に、短い笑話めいた筋が含まれている。「うつぼ物語」では、北山の空洞に住んでいた仲忠の琴の音に野獣が集って聴くとか、九宮貴宮を中心に恋争がおこり、高基とか真菅マスグサとかいう老人まで恋心をおこして争うとかいう類の奇談、「落窪物語」は継子いじめをテーマとしたものであるが、継母の計画で典薬助クニヤノスケという老人に落窪の君を盗み犯させる滑稽が挟まれ、また源氏物語に登場する女性には非常識の天性スエツムハナを持つ末摘花とか、近江の君とかいう人物を出し、哀話の間にある余裕さを浮かばしめている。その他「土佐日記」のような記録にも、可咲の場面が加わっているが、中古時代の後宮女官たちは、どの程度自ら笑うことにわが人生の意義を觀じえたものであろうかは、

問題である。随筆「枕草子」は、中古時代の女房連の笑に連なる感情を看るに重要な参考作者であるが、清少納言の仕侍した後の定子は、特に性来楽天的開放的であつたらしい。そこで周囲の女房たちも自ずから、日常の笑を愛したという解釈もつくが、枕草子の後半には別して清少納言が後に奉侍していた時代の明かるさを描いている。もちろん笑話めいたものが多く見られる。枕草子前田家本によると、巻中に笑の字の出てくるものが約七十余、「笑む」は六度、「さるがふ」は三度出ているとの統計を示した研究者もあるが、多くは、喜劇のように構想めいたものではなく、「をかし」にあたる機智や諧謔である。例えば八段の中に、

櫓の木のはるかに高きが立てるを見て、いくひろかあらんなどいふに（註、清少納言が訊いたのである）櫓中將成信、もとより打切りて定証僧都の枝扇にせさせばや、とのたまひ――

云々とある小話は、定証という山詣寺別当の僧が殊更に背高であつたのに、櫓の木を切って扇に与えたら巧く似合うだろう、と笑談を書き記したものである。その他、大進生昌の咄（六段）、動物では翁麻呂咄（七段）など読者に微笑を催さしめる。「法師のことは、をそこ女のことば、げすのことばは必ず文字あまりたり」（四段）と評しているのは、清少納言の観察の深さを証している。人生に係わり余裕ある性格が、「春は曙」というような随筆を書き立てることともなったのであろう。

ただし、ここに残された疑問は、枕草子を埋めて、しばしば出されている何々は「をかし」という「をかし」の解釈である。古来の学者の間にも、異解がはなはだ多い。大言海の「をかし」の項には、(1)ヲカシキコト、滑稽ナルコト、笑フベキコト。(2)能^{アイ}ノ間^{アイ}狂言。(3)痴愚ト通ジ痴ナルガ如ク見エテ笑フベシ。アナヅラハシ。(4)物ヲ愛^{アイ}ズル時ハ自ラ笑マルルヨリ転ジテ愛スベシ、賞スベシ、褒ムベシ、オモシロシ、などとなったものと解しているが、(1)(3)と(4)とは何として同義のものとは見えない。もともと「をかし」の語は、中古に下って文献として初めて現われたものであるが「おむかし」の約音として賞美する意味のものと見方は枕草子の中にも適例があるが、内心

にひそかな笑を洩らす意ある用法も、その中に稀でない。即ち可咲の意が、中古王朝時代から中世武家時代によって、漸次意味づよかったもののようである。今は解釈する方法を持たぬが、含笑とでもいいたい心が、中古の庶民間に普く漲っていたのではあるまいか。「今昔物語」や「宇治拾遺物語」のような説話系の文学、「堤中納言物語」のような中世物語文学（「お伽草子」も同様）「徒然草」のような随筆文学、何れもその中に濛朧とした「をかし」の波を漂わしている。特色こまやかな文学と評したいものがある。

(e) 演劇類（田楽、狂言、喜劇等）——室町時代に成立した能狂言は、「洛陽田楽記」（大江匡房等）「太平記」の一項田楽事（巻27）「文安田楽記」（文安三年）等を参考し、更に「世阿弥十六部集」の類を併せ考えるに、それは田楽能の改良されたものである。かつ観衆を笑わすことを主眼とした田楽は古典的の能と現代的の狂言を両立せしめ一時に能五番、狂言四番を上演さすことを上演規準となるに到った。狂言の種類については複雑多様であるが、便宜、知情意の三方面からこれを分類する。

- (a) 知性に係るもの——(1)誤解痴愚本位「末広がり」「苞山伏」など。(2)行為齷齪本位「花子」など。(3)詐偽本位「米市」など。(4)諷刺本位「蚊相摸」など。(5)弄故誇張本位「酔^{コゾツケ} 臺^{ヌハジカミ}」「金閤」など。
- (b) 情性に係るもの——(1)好色飽食本位「枕物狂」「蛻^{ヌケガヲ}」など。(2)摸倣真似本位「大般若」(3)妄動本位「東西選^{ドチ}」など。(4)靈驗信仰本位「川上」など。(5)奇行本位「文荷^{フミニホイ}」など。
- (c) 意性に係るもの——(1)不覺本位「飛越^{トビコエ}」など。(2)悪計本位「磁石^{アツケイ}」など。(3)擬勢本位「千切木」など。(4)無茶な指導「庖丁聲」など。

以上は、狂言のものに和泉流、鷺流、大蔵流等流派の別により、構想に差異が出ているため、確実な分類をすること不可能なのであるが、まず喜劇としての本質を具備していると評してよからう。登場人物の種類も (1)神仏精霊物(2)大名物 (3)年貢納めの百姓物 (4)夫婦、嫁取、簀取物 (5)商人職人物 (6)不具片輪物 (7)坊主山伏物 (8)六道辻物 (9)盜賊乱棒物 (10)座興者物 (11)老衰者物 (12)怪異物というような分類がされているだろう。その中には神靈

や大名やも出てくるが、庶民乃至愚人悪人が多く見られるということは、喜劇の性格を裏付ける証左とも見られる。「吾妻鏡」に「猿楽（註、狂言のこと）ニ参ル小法師、中大丸ハ雲ヲ施シ上下ニ頤ヲ解カシム」とあり（建久5，ウ8，20条）とあり、「源平盛衰記」には、「ヲカシキ事ヲイヒツゲテ人ヲ笑ハカシ侍ルゾカシ」とその目的を述べている。

(C) 結 論

可笑という情性は、前述もしたように、もともと笑痴の性格のものもあって、どの層が代表するかという問題は解しかねるが、年令で言えば、年若い児童少年は何かにつけて笑の表情を多く見せる。また、貴族に比べると俗人の方が笑いやすい性を持っている。そこで笑の種類を、①客観的に単純なもの、②やや主観的で複雑なもの、③ Humour の笑と云うように三分してみると、

(1) 客観が主因をなしているもの

- (イ) 高貴を自任しているもの、例えば大臣、美人、大学者、僧侶等が、ある機会に卑賤なものの姿、乃至クシヤミ、放屁などをした時
- (ロ) 常識で不合理不似合の所作をなすこと。例えば貧人が立派な服装をすとか、不具の妻がやきもちをやくとかなどである。
- (ハ) 巧妙な物まねをした時。例えば、一少年が犬の吠える声をうまく真似するなど笑を招く。
- (ニ) 社会の習性から見て不可能と見られたことを自負してやり、予想もしないことを実現しての笑、例えばサーカスの綱渡りとか、景品籤引に意外にあたったとかの時出す笑。
- (ホ) 馬鹿者、阿呆者の動作やことばなど見た時、乃至、天性異常の痴性を持つもののやり口、これは特に狂言の内容に多く出てくる。
- (ヘ) 奇妙珍妙な行動を見せられた時、例えば、大衆の中で陰部を示して平気であるものについてなど。

(2) 主観性が笑の種となっているもの。

- (イ) 殊更に自分に対する某の愛情を知りえた時、例えば、ある美人から恋文を送られてそれを見た時に出る笑。
 - (ロ) 妄想、から威張る他人の心を知った時、例えば、チンピラが将来大将になると放言するのを聞いた時など。
 - (ハ) 卑怯で臆病者の心を知った時、例えば、猫を恐れる僧侶の話の聞いて笑を催すなど。
 - (ニ) 大きく立てた計画や見当やが意外にもはずれた場合。例えば、入学試験不合格を知らされた心中など。
 - (ホ) 不思議の出来事が重複して発生した時、右側の下駄の緒が切れたと知った時、続いて左の下駄の緒が切れ怪しげな気持ちからおこる笑など。
 - (ヘ) 同音異義のことは使い、例えば歌詞における機智的諷刺味の多いものなど。
- (3) 主観客観の接触から生ずる中間的可笑味。

哀情が低下すると歓喜の心が盛りあがってくる。しかし、それが転じて反復されることは心理的に免れない。いわば、涙と笑とは狭い溝の中に於て接触している。その空隙の一線は無心とか虚脱とか呼んでもよからう。釈迦の拈華微笑はそうした特異の笑であって、微笑には涙の光が覗かれる。そこには、洗練された意力があるわけで、例えば外国留学を見送る母が涙を押さえて微笑しているその姿。あまり英才とも云われぬ大臣がずらりと議会の席に並び立っている様子など。社会生活の中にこの種のユーモアの例は甚だ多い。文学にも、この可笑味即ち **Humour** を適度に加えて、傑作を書きあげた例が相当に多い。これには作家の天分や特殊の人生観というものも関係するので、それだけに基礎、教養がなければ、読者に上品な可笑味を与えることができない。

ここで「無心」ということを提示し本文の結論としたい。いかにも傑作と云えば、可咲より悲壯を中心としたものが作の大半である。しかし、無為の価値を今少し理解するならば、笑の傑作が現われる筈のものと云いたいのだ。人類が虚無の意義を深く体験するに及び、生命の深底がいかに笑の心に

連なっているかを信じるであろう。仏教の禅宗は「無」を透徹せしめ、他宗のものと異なる宗風を生み出した。なお中世近世現代文学がこうした禅風の影響をいかほど多く吸収し異彩を表わしていることか。これも特に日本文学について考えたい。西洋人のあるものは、日本人の笑い方を無気味の笑方だ評しているものもあるという。軽くて朗かなさが乏しいというのであろう。外人には、俳句等に含まれる **Humour** が理解できぬように、日本人特有の微笑が解されぬのである。なお近世文学には、中世文学のそのように幽微の光が闇から洩れ出るようなものは乏しいが狂歌、川柳の滑稽端唄の類はもとより、散文の中にも、仮名草子、浮世草子、洒落本、黄表紙、滑稽本の如き、演劇関係では浄瑠璃、歌舞伎、狂言のある作にわたり、いわば近世型の滑稽諧謔の文芸が山積している状態である。これらについては本論の続篇として更めて公表することにしたい。